

石巻通信第6号（08年6月26日）

☆ストレートで何が悪い！

高成田享

漁船用の燃料（重油や軽油）の値上がりにたえかねた漁業者がイカ釣り漁船を皮切りに、「休漁」をはじめた。漁師のストライキである。多くのメディアが注目して、ニュースとして取り上げたことで、デモンストレーションとしての効果はあった。しかし、漁業者の要求する燃料への助成金は「ストレートすぎる」（町村官房長官）として、受け入れられていない。

休漁の少し前、石巻魚市場に行ったら、魚市場の社長で水産界の論客でもある須能邦雄さんが次のようなことを語っていた。

「魚市場としては、休漁は荷が入らないので困るが、油価高騰による漁業者の窮状もわかる。生命の危険を考えながら、国民に水産物を供給している漁業者への思いやりとして、油価高騰への助成金を出すことはできないのか。水産業は、買い手の大手スーパーが強いこともあり、燃料コストの上昇を消費者に転嫁することが難しうえに、仮に転嫁できても、それが国民の『魚ばなれ』を進め、水産物の自給率の低下につながりかねないからだ」

私は、巨額の財政赤字が問題になっているなかで、漁業への補助金となると、なぜ漁業だけということになり、国民の支持を得ることは難しいのでは、と答えた。そして、食料の自給率を高めることは、いまや国家的な重要課題だから、その一環として水産物の自給率を高める必要性があり、そうした視点を強調するなど工夫をすれば、漁業者の声が国民に届くのではないかと話した。

しかし、町村長官の「ストレートすぎる」という言葉を聞いて、それが私の反応と同じようなものだったのだが、なぜストレートでいけないのか、と考え直した。あれやこれやの理屈をこねるよりも、漁民の要求になぜ素直に耳を傾けないのか、という気持ちがわいてきた。魚市場の社長が言うように、漁業資源は日本の国民にとってかけがいのないものだし、その確保が危なくなっているときに、まさに患部を手当てするように、助成金を出すことが「補助金＝悪」という図式のなかで、葬り去られていいのか、と思い始めたのだ。

子どものころに、ご飯を残すと、「お百姓さんが苦勞してつくったお米を粗末にはいけない」としかられたものだが、それは魚にも言える。「漁師が生命をかけて、獲った魚を粗

末にしているのか」と。現在の稲作は、農作業の機械化や農薬散布によって、以前とはだいぶ違うものになってきたが、漁業の実際は「板子一枚、下は地獄」という昔から今もそれほど変わっていないように思う。

石巻に来てからの私の漁船体験は、凧（なぎ）の日しかなかったが、それでも突然に風が強くなり、波頭が白くなり、船が揺れはじめると、救命胴衣のジッパーを閉め直して、心を落ち着かせたものだ。遭難の報を聞くと、低気圧の接近のなかで無理をしたのではないか、漁獲した魚を捨てられなかったのではないか、などと遭難した船の漁労長や船長の思いを勝手に想像してしまうのだ。

ちょうど二日前、福島県小名浜港所属の巻き網漁船第58寿和丸が時化（しけ）の千葉県沖で沈没、20人の乗組員のうち助かったのは3人だけだった。大きな横波をかぶったようで、防ぎようのない事故だったのだろう。しかし、その背景には、燃料油の高騰があったのではないかと思う。低気圧の接近で、帰港することもできたはずだが、往復の燃料代が漁労長の頭をかすめたかもしれない。帰港せず、遭難海域に停泊した理由について、船主は「深層心理として燃料の節約になるという考えはあったかもしれない」と語っている（読売新聞6月25日）。



定置網漁の現場

この船は、「パラシュートアンカー」といういかりを海中に投げて、船を安定させようとしていたという。しかし、「船を風に立てる」（風向きに垂直にする）パラアンカーは、風向

きと波の方向とが一致しているときは有効だが、低気圧の接近で風向きが変わると、風向きとうねりとの方向がずれ、船が横波を受けるようになる危険もあるという。そんなときは、船の舵を調整して波に垂直になるように操縦するわけだが、それにはエンジンをかけておかなければならない。寿和丸のエンジンは切れていた、という証言もあった。アイドリングにしなかったとすれば、その背景にやはり燃料代の「深層心理」があったかもしれない。

定置網の番屋に行ったときに、「帳場」と呼ばれる網元が酔いつぶれながら、何度も同じ話を繰り返していた。「定置網の仕組みなんて、しろとうにはわからないよ。だけど、漁師が生命を賭けて、獲ってきた魚があるから、国民が飢えなくてすんでいる。そのことを消費者は忘れていないじゃないか」。

定置網の漁船員は、漁の期間中、この番屋と呼ばれる飯場で暮らしている。その食堂での夕食に同席させてもらったが、かれらの食事は「かつ食らう」という表現がぴったりで、話もせず急いで食事を胃の中に押し込んでいる感じだった。テレビのニュースにも何の興味も示していないようだったが、ニュースが天気予報となり、天気図が映った瞬間、「ウォー」という声とともに、乾いた笑い声がいっせいにあがった。天気図には、いくつもの低気圧が並んでいて、それを見て反応したのだった。明日の未明には、あの図のなかに出ていく、「よく行くぜ」という自嘲的な笑いに思えた。



石巻魚市場に水揚げされるカツオ

福祉の現場に行けば、こんな厳しい条件の人への補助を削減するのか、という場面を目にするだろう。農業でも、中小企業の現場でも、同じことがあるだろう。だから、漁業の燃料代に公的な補助を、という要求が一般の国民に違和感をもたれるのは当然だろう。しかし、まさに生命を賭けているという「関係の絶対性」はあると思う。前述の魚市場社長が燃料代への公的な助成を求める運動を盛り上げたいと言い、漁業者への「思いやり」予算だと語っていたが、その通りだと思う。

食料安保から説き起こして、漁業者への助成がなぜ必要なのか、という理屈はあえて書かずに、昇華しない「現場」の思いを書いてみた。